九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

釜山第一商業学校について ： 在朝鮮「内地人」学校の事例研究

稲葉, 継雄
九州大学大学院人間環境学研究院国際教育環境学講座 ： 教授 ： 比較教育文化論

https://doi.org/10.15017/3661

出版情報：大学院教育学研究紀要. 6, pp.19-38, 2004-03-30. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院教育学研究紀要，2003，第6号(通算第49号)，19-38
Res. Bull. Education, Kyushu U., Vol.6, 19-38

釜山第一商業学校について

── 在朝鮮「内地人」学校の事例研究 ──

稲　葉　継　雄

はじめに

1906年4月1日，釜山居留民会立「釜山商業学校」(後の慶尚南道立「釜山第一公立商業学校」)が開設された。釜山高等女学校と同時，京城中学校に先立つこと3年であった。したがって釜山第一商業学校（以下，適宜「釜山一商」あるいは「釜一商」と略する場合がある）は，「半島最古の記念すべき中等学校」「日本が海外飛躍時代の最古の海外の商業学校」「外地に於ける日本最初の中等教育機関」[(1)]などと称される。だがこの学校は，単に古いだけではなく「朝鮮商業教育のメッカ」[(2)]として知られていた。1922年4月に官立京城高等商業学校が創設されてからは，「朝鮮商業教育のメッカ」は京城高商に移ったとみるべきであるが，中等レベルの商業学校としては，依然として釜山一商が朝鮮随一であった。

本稿の狙いをひと言にしていうならば，釜山一商が「朝鮮商業教育のメッカ」であったその所以を実証することである。とくに教員の人事や生徒の進学・就職状況からこれにアプローチしてみたい。

資料としては，釜山第一商業学校同窓会（九徳会）の会誌・会報にほぼ全面的に依拠する。したがって，手前味噌的な内容もあろうと思われるが，その点を常に意識しつつ叙述を進めたい。

一．学校沿革

釜山には1892（明治25）年5月から暫くの間「釜山共立商業学校」という学校が存在したようであるが，詳細は不明である。釜山商業会議所発行の『釜山要覧』にも，「嘗て釜山商法会議所は本港商家子弟の為め商業教育施設の必要を認め二十五年五月釜山共立商業学校を開設せしことありしも後遂に廃絶」[(3)]とあるに過ぎない。

1902年，商業学校の先行形態として釜山公立小学校に補習科を設置することになり（10月開設），同校校長国井泉が，教員傭聘などの用務を帯びて一時帰国した。この時国井は，韓国居留民子弟に対する商業教育の必要性を次のように述べている。

日本人は，劣等なる韓国人にまで，商業家としては，支那人とも同一視されないと云ふ憐れな様で居る，日本の居留地は到る処に草が生へ，虫が泣(ママ)いて居ると云ふ有様であつて，折角軍人が汗を

流して拡張した所の居留地と云ふものも，日本の商人の意気地のない為に，ヤツと得た所の商業上の権利とか信用とか云ふものも，年所を経ると共に段々退消縮少(ママ)して行く姿を見るのは，実に慨嘆に堪へぬ次第であります。

そこで之を矯正する手段は如何，是に対して何うするかと云ふことは，是れ実に目下急中の急なる問題である，而かも国家は之を憂へず，国民は之を顧みない，殆ど韓国将来の前(ママ)後策に就て何う斯うと云ふ考を有たないと云ふやうな現下の形勢を見ては実に堪らないのです，さう云ふ点を思ふて見れば，先づ以て今日より以後其社会に立つて事を成さうと云ふ子弟の頭悩(ママ)にだけでも，総て外国人に対する商業の仕方，海外に於ける国民の本分と云ふやうな大主意だけでも過らぬやうにせしめるのを，今の教育に待つより外はない，今度釜山に商業の中学程度の学校を施設すると云ふのも，詰り大に内外の人の助力と同意を得て立派な結果を結びたいといふやうな考からなのである。(4)

国井泉の見解が，国家を意識したおとなのものであるとすれば，当時の子どもの目には，日本の商業学校や釜山公立小学校補習科は次のように映っていた。

夏休みが来ると内地の中学や商業に遊学中の連中が釜山に帰省して，白線や黄線を巻いた「中」や「商」文字の徽章をつけた帽子をかぶり，袴をはいて往来を闊歩し，或は南浜に泳ぎに来るのを見かけると子供心にとって羨しかったものである。

然し漸く居留民の数もふえて来て，釜山にも中等学校が無ければ女子(ママ)の教育に不便であるとの機運が熟して来たが，未だ海外では例のない事ではあり，早急の実現は困難だったので，先づ商業都市の釜山のこと故，男子の教育は商業学校に改組出来る様に商業補習科を，又女子には高女の前身として女子補習科を，それぞれ小学校高等科の上に開設されたのが明治三十七（35の誤り—稲葉註）年で，私が高等二年の時であった。それでも未だ真実の中等学校の資格はなかったので，入学する者は少く，内地への進学をせきとめる程ではなかった。(5)

「内地への進学をせきとめる程ではなかった」状況を打開するため，日本国内では「朝鮮に中学校を設く可し」という世論が高まってきた。「朝鮮に中学校又は中学程度の実業学校を設くるは目下の急務にして政府は此設立に相当の便宜を与ふるは勿論内地の中学校と同様の取扱を為すに於ては居留民の幸福此上ある可からず朝鮮の地に生れて朝鮮の地に成長し朝鮮の地に於て一通りの教育を受くるを得るに至りてこそ始めて我殖民事業も完備したりと云ふを得べし」(6)というのである。日露戦争中の1905年春の時点で「我殖民事業」が云々されていることが注目される。

このような国内の教育世論に後押しされてか，1905年６月，韓国各地居留民会の代表は京城で会議を開き，「実業教育国庫補助法及教育基金令を韓国居留地へも実施ある様其筋へ請願する事」「韓国居留地に官立中学校官立実業学校を設立ある様其筋へ請願する事」(7)などを決議した。しかし，これらの請願は認められず，釜山居留民会は同年８月に至って，居留民会立として商業学校を創立することを決めた。「釜山商業学校」が西山下町仮校舎において開校したのが，翌1906年４月のこ

とである。

これに先立つ同年２月の『教育実験界』は，「全国に於ける実業専門学校側にては既に釜山居留地商業学校に今春四月より補助実施の手続を了したりと云ふ」[8]と報じている。ここでいう「補助」とは，後述するような教員派遣を指すものと思われる。このような国内教育界の協力があって，釜山商業学校の開校が可能になったのである。

同じく1906年の11月「居留民団法」が施行され，従来の民会は民団に改編された。したがって校名も，「釜山居留民団立釜山商業学校」となった。

1907年中の変化は，１月，「在外指定学校職員退隠料及遺族扶助法」の適用によりいわゆる「在外指定学校」となったことと，７月に宝水町の新校舎へ移転したことであった。

1912年４月，総督府の「朝鮮公立商業専修学校規則」が制定され，同規則に則って釜山商業学校は「釜山公立商業専修学校」と改称された。続いて５月，宝水町から九徳山下（大新町）の新築校舎に移った。この地が同校の「終の住み処」であり，同窓会の名も九徳山に由来する。

1914年４月，経営母体が釜山居留民団から釜山学校組合に変わった。釜山商業専修学校の校名に変化はない。

1915年１月，寄宿舎(樹徳舎)が竣工した。公的財源がなかったので，校友会の事業として借財をもって建設されたものである。教諭村田長太郎が専任舎監として家族とともに常住し，舎生と起居をともにした。(ただし，1924年５月に村田が辞任した後は，複数教諭による舎監輪番制となった。)

1921年８月，兵庫県西宮の鳴尾球場（当時，甲子園球場はまだない）で開催された第７回全国中等学校野球選手権大会に初めての朝鮮代表として出場，３回戦まで進んだが，同大会優勝の和歌山中学に惜敗した。釜山商業専修学校野球部は，1910年代後半も，エース谷口五郎を擁して朝鮮屈指の強豪チームであったが，1920年の第６回大会まで朝鮮の学校には全国大会出場権がなかったのである。

1922年２月，「朝鮮教育令」の改正を契機として釜山商業専修学校は「釜山商業学校」と改称されることになった。しかし，そこには厄介な問題があった。1896年３月，日語教育を主目的とする私立「開成学校」として開校され，1909年４月，韓国政府に献納されて公立の「釜山実業学校」となり，1911年11月，第１次「朝鮮教育令」の施行とともに「釜山商業学校」を名乗っていた朝鮮人学校があったからである。時の勢いとして結局，朝鮮人側の釜山商業学校は「釜山鎮商業学校」への校名変更を余儀なくされた（1922年４月)。これに対して「父兄・同窓生らは，約１年間，是正を要求する陳情などによって校名還元に努力したが，なんら成果を得ることができなかったので，ついに在校生たちは，本校創立以来初めて同盟休校に突入した」[9]のである。しかし，ストライキの目的が達せられる筈はなかった。

続いて1923年３月，釜山商業学校はまたもや「釜山第一商業学校」と改称された。今回の校名変更は，釜山学校組合から慶尚南道への移管に伴うものである。これに連動して，同じく慶尚南道が管轄する釜山鎮商業学校も校名変更され，「釜山第二商業学校」となった。内地人学校を「第一」，朝鮮人学校を「第二」としたのは，商業学校としては「日本人学校が先に開校したという理由から」[10]

であったが，内地人優先政策の反映であったことはいうまでもない。

釜山第一商業学校が慶尚南道立となったことは，学校に対する道の監督権が強化されたことを意味した。そして，それは早速，内地修学旅行の差し止めという形で現われた。1923年の５年生の内地(関東～関西)修学旅行は，関東大震災直後の「時局に鑑み，此の際は鮮内に小旅行されたし」[11]という慶尚南道内務部長名の通達によって中止されたのである。

1928年の５月と10月，大倉記念講堂と本館・講堂が相次いで落成した。第４代校長宇都宮益治が就任（1926年２月）第一着手として施設の充実に力を入れた，その成果であった。これについて宇都宮自身，次のように記している。

父兄有志などの力により当局を動かし煉瓦建の本館と二，三教室が出来，又釜山議員諸君の奔走を促がし並々ならぬ努力で大倉喜八郎男爵に講堂を建てゝ貰つた。男爵としては縁もゆかりも無い学校に寄附したという事になれば直ぐ新聞に出るし，それでなくとも全国各地から色々の寄附金の強要に困り抜いて居るとの固辞であつたが様々な名目をつけ辛うじて大講堂が出来上つた。[12]

また本館に関しては，1996年11月の「第２回ニュー釜山会里帰りの旅」のひとコマとして次のようなエピソードが残されている。

釜山一商では，学校を取り巻く自慢の桜並木は跡形もなくなっていましたが，堂々たる本館は昔のままの姿を誇っており，校内に一歩足を踏み入れた瞬間時が消え，大人になりかけの五年間がマザマザと脳裏を忙しく駆け巡りました。……（中略）……

九十歳になった同行の母親が，「あんたが在学中には，商売が忙しくて一度も来たことがなかったが，こんな立派な学校に通っていたんやネェ」と感嘆する言葉を耳にして，ジーンと全身に感動が駆け巡りました。[13]

1931年９月満州事変が勃発，これを受けて釜山第一商業学校４・５年生の兵営宿泊が開始された。以後，行先は年によって龍山の歩兵第79連隊だったり大邱の歩兵第80連隊だったりしたが，毎年10月か11月に実施された。

1936年度中に(正確な月日は不明)校歌が変わった。この時の在校生によれば，旧校歌の「歌詩(ママ)が時代にそぐわない，のが理由であると仄聞した。多分外部の圧力によるものであったであろう」[14]という。新旧校歌の歌詞は下記のとおりで，新校歌の３番にある「士魂商才」が，釜山一商の伝統的スローガンであった。

(旧)	(新)
１．八道の上旭かげ	１．縹渺と玄海の涛
朝鮮やか照らすとき	洋々と洛東の水
忍ぶ市場のしるき跡	偉大なる自然を享けて

釜山の港商工の
栄日に増す庭にして
普天に富を求むべき
道を教えん基なりぬ

2．祖国あなたに玄海の
怒涛へだて大陸の
山河遥かに開く門
釜山の港人文の
光日に増す庭にして
卒土に富を分つべき
技を授けん基なりぬ

栄え行く釜山一商
一商　一商　一商
わが一商

2．誠実に航路を照らし
勤労に荊棘を拓き
全校を一つ親族と
睦み合う釜山一商
一商　一商　一商
わが一商

3．進まむか世界の市場
護らむか皇国の富を
商才と士魂磨きて
いざ起たむ釜山一商
一商　一商　一商
わが一商

1941年12月太平洋戦争の火蓋が切られるや，その半月後（12月23日）には第34回生の繰り上げ卒業式が行なわれている。以後，釜山一商も他校と同様戦時色に覆われ，やがて1945年８月15日を迎えるのである。

居留民会立釜山商業学校開設以来の修業年限および入学資格を図示すれば次のとおりである。

	1906	08	11	15	21	45
修業年限	４年	３年	４年（予科１年，本科３年）	５年（予科２年，本科３年）	５年	
入学資格	高等小学校１年卒	高等小学校２年卒	高等小学校１年卒	尋常小学校卒		

また収容生徒の総定員は，当初120名であったが，1907年200名，1911年300名，1915年450名，1917年500名，1923年550名，1941年600名，1942年650名，1943年700名と増加し，ピークは1944年の800名であった。卒業生は，第１回（1908年）から40回（1945年）まで計2,685名である。中退者がかなりの数に上ったことになる。

二．教員の去就

1．校　長

初代校長橋本基一は，島根県立商業学校校長在任中の1906年２月，釜山商業学校創立事務取扱を命ぜられ，４月，校長に任命された。在任３年にして1909年６月，熊本県立商業学校の校長に転任した。

第２代校長田崎要は，市立甲府商業学校校長から異動，韓国併合を挟んで３年弱勤続し，1912年３月，依願退職した。

第３代校長伊香賀矢六は，1869年，山口町（現・山口市）近郊に士族の長男として生まれた。1895年東京帝大法科を卒業し，大蔵省に入省，大阪高等商業学校助教授～教授（1899年～）を経て1906年６月，滋賀県立八幡商業学校の校長に就任した。八幡商業学校は，1886年に日本初の県立商業学校として創立された由緒ある学校である。伊香賀は，校長就任の翌年（1907年），詞を土井晩翠に依頼して校歌を制定し，同年11月１日の校歌発表式で次のような式辞を述べている。校歌に対する伊香賀の熱い思いを窺うことができる。

我校の校舎之は我校の骸骨たるに過ぎないのであります。活ける我校の存在は校旗と校歌とによつて初めて之を認むることが出来るのであります。斯く一は我校を有形的に表示し，一は我校を精神的に表示するものとすれば，校旗は国旗に準じ，校歌は国歌に準じ之を尊敬しなければならぬこと丶思ひます。故に今後校旗と校歌との前では必ず姿勢を正し，脱帽するを以て礼と致し此掟に背くものは我商業学校を侮蔑するものと認めます。(15)

1912年３月，伊香賀は八幡商業学校長から釜山商業専修学校長となった。この後，八幡商業学校と釜山商業専修学校（～釜山第一商業学校）の間には姉妹校的な関係が生じる。その要因は，校歌と教員人事である。釜山商業専修学校の校歌は，伊香賀が就任直後に制定したもので，作詞者は，八幡商業学校校歌と同じく土井晩翠であった。教員人事は，伊香賀矢六をはじめ，後述する北川勝次郎・松原俊夫らの経歴にみるとおりである。

伊香賀は，釜山商業専修学校～釜山商業学校～釜山第一商業学校と推移する中で13年間勤続し，1925年３月，依願退職した。釜山在勤中の1922年４月，官立京城高等商業学校が開設され，伊香賀がその初代校長に擬せられたが，釜山の地元有志の慰留にあい，辞退したという。

植木好きの伊香賀校長は，学校の周囲に数百本の桜を植えさせ，一帯はやがて，花見の名所に数えられるようになった。1929年の桜を見て間もなく（６月25日），伊香賀は釜山で歿した。

伊香賀矢六が第３代校長を辞した後，後任には，1913年４月以来教頭として伊香賀校長とコンビを組んできた北川勝次郎が昇任するものとみられていた。しかし，慶尚南道当局は，北川を校長事務取扱にとどめ，しかも約１年間（1925年３月28日～1926年２月18日）据え置いた上，内地から新校長を招聘したのである。この人事について，当時の教諭松原俊夫は次のように批判している。な

お，この発言は，戦後も40年を経た1985年９月のものである。

伊香賀先生は大正十四年に退官されましたが，そのあとには当然北川先生の校長昇格が常識でありました。所が道は北川先生に校長事務取扱というけちくさい職を与え，一年間その儘にしておきました。私達は北川先生が校長になられるのを期待して職員生徒こぞってその昇格を道に申し立てましたが，当時朝鮮の事情は官僚万能，教育も行政も官吏が独断専行の時代でした。当時の知事は私達運動員に対し「お前等には過ぎる程の立派な校長を内地から入れるから安心して勉強せよ」という挨拶で追い返されました。果して過ぎる様な立派な校長であったかどうか。北川先生の様な立派な先生を排してまで，他の校長を迎えなければならぬ理由が何処にあるかということを，今更ながら糾明したいと思うのであります。(16)

1926年２月18日，第４代校長宇都宮益治が就任した。宇都宮は，福岡県築上郡の生まれ，東京高等師範学校1910年卒である。熊本・石川・大分の県立中学教諭，門司高等小学校長，大分・愛媛県視学などを務めた後，市立豊橋商業学校長を経て釜山第一商業学校長となった。彼自身によれば，釜山渡航までのいきさつは次のとおりである。慶尚南道当局による独断専行という批判があったことは上述のとおりであるが，宇都宮本人の主観では，あくまでも総督府と慶尚南道知事の「懇請」「再三の要望」に基づく人事であったという点がポイントである。

実は大正十二年大震災の年二月，愛知県豊橋市に一千人の大きな商業学校を新設につき，其校長を文部省に懇請せられ永年本省在官中の自分に望まれて豊橋市に出て満三年の時，総督府から釜山一商校長に懇請せられ慶南知事より再三の要望もあり，豊橋市に相談の結果，せめて第一回卒業生の出る迄留つて欲しいとの事であつたが，文部省が中に入り，自分の信ずる後任校長を責任を以て推薦するという事で纏り，釜山への実現が成立つた。(17)

宇都宮は，釜山第一商業学校長として1937年７月まで11年５ヶ月間在任し，大田中学校長に転じた（～1939年３月）。その後満州に行ったようであるが，詳細は不明である。再び釜山に戻って，「益治先生は大新里に六千六百坪の土地を買って，私立学校経営という遠大なご計画あった矢先，終戦」(18)となった。

釜山第一商業学校における宇都宮の業績については，「伊香賀，北川両氏を失った釜山一商はその後どうなったか。両先生が釜山着任以来苦節十年，築き上げられた校風は崩れ去って学園は全き変貌を遂げた」(19)という辛辣な見方がある一方，次のような肯定的な見方もある。

永年に渉る伊香賀校長さんの後を受け継がれて，先生には人知れぬ苦心が数々あったことでありましょうが，先生は一商の為めに此の点を改善し，設備の内容を充実して下さった方であります。九徳創刊号にある様に，一商の新校舎，大倉講堂，寄宿舎，中島記念館並に校庭校門の新築整備と

其の施設は先生の御在任中に完成し，見違へる程立派なものになりました。

若くして大校長になられ，道庁当局との各種の接渉がお上手で，予算の獲得のご手腕は実に見事なものがありました。又御在任中には創立二十五周年記念事業や，三十周年記念事業等も盛大に取り行われたことは，卒業生諸君の記憶にも鮮なことでありましょう。更に時代の先見性にも富んでおられ，自動車部を新設されたり，女子事務員を置くこと等も考へておられました。今日では何でもないことでありますが，当時自動車を置かれたり，女子禁制の一商に女子事務員と随分時代の先きを見通しておられた様であります。[20]

このように宇都宮校長の評価は毀誉褒貶が併存しているが，ここに掲げた辛辣批判が，八幡商業学校の縁で伊香賀・北川のシンパであった松原俊夫によるもの，肯定的見方が宇都宮への弔辞の一節であることを勘案すれば，両方ともバイアスがかかっているとみるべきであろう。

第５代堀内朋の校長人事は，宇都宮（東京高師）から堀内（広島高師）への，すなわち高等師範学校間のバトンタッチであったこと，釜山第一商業学校としては初の朝鮮内でのリクルートであったこと，が注目される。堀内の経歴は，釜山中学校教諭（1918～21年度）・京城第二高等普通学校教諭（1921～25年度）・京城第一高等女学校教諭（1925～32年度）・江景商業学校長（1933～34年度）・平安南道視学官（1935～37年度）・釜山第一商業学校長（1937～38年度）・大田中学校長（1939～40年度）である。釜山一商のみならず大田中でも，宇都宮益治の後継校長であった。

第６代校長兼安麟太郎は，山口県出身で東京帝国大学法学部卒，つまり第３代校長伊香賀矢六と出身地も最終学歴も同じである。1922年４月，官立京城高等商業学校が開設されるや同校教授に任命され，1939年３月まで17年の長きにわたって勤続した。次いで釜山第一商業学校長となり（1939～42年度），その後勅任官として元勤務校に栄転，京城高等商業学校～京城経済専門学校（1944年４月に校名変更）の校長を務めた（1943～45年度）。兼安の人柄については，中村嘉一（経歴は後述）が次のように評している。

高商の教授から，商業学校長となられた方は五名程あるが，名校長としての令名は兼安先生が最も高かったことは，教育界に終始した私が一番よく知って居ることである。お人柄が温厚典雅で親しみ易く気負うところなく無理をしない学校経営が，職員にも生徒にも，心の安らぎを与えて居たものと思う。宜なる哉，先生は高商の校長として再び京城に還られたのである。[21]

第７代校長高田邦彦は，第５代校長堀内朋と広島高等師範学校の同期生である（1915年卒，高田は国語漢文部，堀内は英語部）。ただ高田は，さらに京城帝国大学に進学して経済学を修め，次のような多彩な経歴をたどって最終的に釜一商校長となり，敗戦を迎えた。

朝鮮総督府学務局編修書記（1918～19年度）・京城女子高等普通学校教諭（1920年度）・京城師範学校嘱託（1921～25年度）・京城高等商業学校教授（1926～27年度）・元山商業学校長（1928～30年度）・忠清南道視学官（1931～32年度）・全羅南道視学官（1933～34年度）・釜山第二商業学校長

(1934～38年度)・京畿道視学官（1938年度)・平壌師範学校長（1939～42年度)・釜山第一商業学校長（1943～45年度)

高田は，前述したように広島高師で堀内朋と同期であり，僅か2年間ではあるが京城高商で兼安麟太郎と同僚であった。これらの要因が，高田の釜山一商校長人事にあたって作用した可能性は否定できない。

高田は，すでに釜山二商校長時代,「1937年に中日戦争が勃発してから，国策に呼応したのか軍事教錬に重きを置くようになり，いわゆる皇国臣民化運動に積極参与する特殊な教育に転換した」[22]というが，釜山一商にあっては，時局柄ますます戦闘性を強めたようである。当時の部下職員と在校生は，それぞれ次のように回顧している。

兼安先生は，惜しまれつゝ京城高等商業学校長として栄転，後任に，唯我独尊居士の高田校長来任，一商最後の校長であつた。先生は，感情家で，職員は時々かみつかれた。[23]

温和な人格者兼安校長先生が突如転任され，高田邦彦校長時代に入った。元京城師範校長だったとかで（平壌師範学校長の誤り―稲葉註)，教育には非常にうるさく，又我々に「私を陸軍大佐だと思え」と「神州不滅」を看板に，我々の軍人教育を尚一層厳しいものにした。[24]

以上，歴代校長の経歴をみてきたが，第4代校長宇都宮益治は，自分の後任たちを評して次のように述べている。

自分の後任には全鮮中特別大物ばかりで，視学官，高商教授，師範学校長などから採用せられ，中には一商校長から高商校長に栄進した者さへある。釜山一商が如何に総督府に於て重視せられたかゞ判る。[25]

「全鮮中特別大物ばかり」とは，宇都宮の次の堀内朋から，内地からの招聘ではなく朝鮮内での校長人事となったこと，具体的には堀内が平安南道視学官，兼安麟太郎が京城高等商業学校教授，高田邦彦が平壌師範学校長から採用されたことを指している。「一商校長から高商校長に栄進した者」は兼安である。

「特別大物」であったかどうかは別にして，歴代校長のすべてが，商業学校長あるいは高等商業学校教授を経験した後に釜山（第一）商業学校長となっている。商業教育のベテランしか校長になれなかったということは，釜山一商の格を裏付けるものである。また，歴代校長の学歴も高く，伊香賀矢六と兼安麟太郎は東京帝大卒，宇都宮益治は東京高師卒，堀内朋は広島高師卒，高田邦彦は広島高師～京城帝大卒であった。

2．教　諭

釜山第一商業学校元教諭らの大きな特徴のひとつは，同校に勤務した後他校の校長となった者が多いということである。これに関する宇都宮益治と中村嘉一の発言は次のとおりである。

自分の在任中及び釜山を去つた後も自分の配下にあつた職員で中学校長，女学校長，商業学校長等六人，視学官一人を出して居る。全鮮中等学校長の卵は釜山一商から生まれた感があり全鮮で地方の学校から校長を出したのは極めて稀で，概ね京城府内の中等学校から出て居り，それにしても一商の如く多人数を出して居る学校は全く無い。(26)

当時の釜山一商は，優秀な生徒諸君が多かったが，先生方も立派な方が多かった。このことは，私が他の学校に転任して，痛切に感じたことである。従って後ほど校長となられた方が実に多い。伊香賀校長さんが採用された方の中からは，北川，村田，曽良，守分，松原，岡本，間宮の諸先生と私とであって，宇都宮校長さんが採用された方の中からは，岡本，望月（視学官），加藤，樋口の諸先生であって，合せて十二名の多きに達し，京城中学，京城高普，京城師範と肩を並べるものである。(27)

宇都宮が「一商の如く多人数を出して居る学校は全く無い」といっているのは誇張に過ぎるし，中村のいう「十二名」の中には内地に帰ってから校長となった者も含んでいる。そこで以下，他校校長に昇任した釜山一商元教諭の経歴を改めて整理してみよう。（釜山一商着任順）

村田長太郎は，釜山商業専修学校から釜山第一商業学校にかけて11年８ヶ月（1912年９月～1924年５月）在任し，1915年１月以降は寄宿舎（樹徳舎）の専任舎監であった。1924年５月，神戸・須佐商工学校の校長として内地帰還し，以後1949年まで兵庫県および京都府の商工・商業学校長を歴任した。

北川勝次郎は，1901年７月に東京高等商業学校を卒業し，母校・八幡商業学校の教諭となった。この八幡商業に1906年６月，伊香賀矢六が校長として来任し，1912年３月，釜山商業専修学校長として転出したのである。伊香賀の息子達夫によれば，伊香賀は，「北川先生とは八幡以来の仲よしであつて，北川前衛，伊香賀後衛のテニスは鳴らしたものさとうそぶいていた」(28)という。北川は，伊香賀に１年遅れて1913年４月，釜山商業専修学校に赴任，教頭として伊香賀校長を補佐した。爾来12年，1925年３月に伊香賀が辞任するや後任校長と目されたが，結局は校長事務取扱に甘んじることになり，1926年２月，宇都宮新校長を迎えた。宇都宮の着任式における北川を偲んで，中村嘉一は次のように述べている。

宇都宮校長さんが着任され，私達職員一同が其の前に立った時，先生は一同を代表され，十年も年下の新校長さんに，一同結束して教育に専念しますと挨拶されましたので，私は胸が詰って思わず涙が零れました。このことは私が元山で三ヶ年間，年若い校長さんに仕えた時のよい教訓となり

ました。因に当時北川先生は高等官四等，宇都宮校長さんは五等でありました。[29]

1926年２月，釜山第一商業学校校長事務取扱を辞すると同時に北川は，馬山商業学校の校長に任ぜられた。しかし，釜山一商は当時すでに５年制であったので，「三年制度の馬山の校長とは誰が考えても甚しい左遷と思われ」[30]たものであった。その故か北川は，１年後の1927年３月，母校であり旧勤務校でもある八幡商業学校に戻り，同年10月１日付で校長事務取扱，翌年１月31日付で校長に就任した。以後，同校第16代校長（ちなみに伊香賀矢六は第12代）としての在任は，1941年３月まで13年余に及んだ。

佐伯為蔵は，釜山商業専修学校教諭を1915年６月から1920年９月まで務め，山口県立長府高等女学校の校長として転出した。

守分伊佐美は，釜山商業専修学校から釜山商業学校にかけて約７年（1916年５月～1923年３月）在任し，釜山高等女学校教諭（1923～25年度）・慶尚南道師範学校教諭（1926～30年度）・晋州高等普通学校教諭（1931～35年度）を経て校長となった。校長在職校は馬山商業学校（1936～38年度）と晋州中学校（1939～42年度）で，馬山商業では，後述する曽良義一の後任校長であった。

曽良義一は，「東大を出て実業界――転んじて教職のコースを辿られた丈けにサバケタ先生だった」[31]といわれている。釜山第一商業学校教諭（1920年３月～1927年９月）から馬山商業学校長（1927～35年度）となった。その後10年の消息は不明であるが，「引揚当時，釜山で私立商業学校建設経営にお骨折りだった」[32]という。

中村嘉一は，京城高等普通学校附設臨時教員養成所を卒業して密陽普通学校訓導（1916年３月～1919年３月）となったが，これに飽き足らず東洋協会京城専門学校に入学，その後身たる京城高等商業学校を1922年３月に卒業した。（ちなみに同校は，東洋協会植民専門学校京城分校～東洋協会京城専門学校を経て1920年５月，私立京城高等商業学校となり，1922年４月，官立化された。）

京城高商を卒業した年の11月，伊香賀校長の知遇を得て釜山第一商業学校教諭に任用され，1935年６月まで12年半にわたって勤続した。その後，大邱商業学校教諭（1935年６月～1938年５月）・元山商業学校教頭（1938年５月～1944年３月）を経て，1944年４月から敗戦まで兼二浦高等女学校長を務めた。

岡本茂は，1923年に山口高等商業学校を卒業して直ちに釜山第一商業学校教諭となり，1938年度まで16年間勤続した。その後1939年から43年まで江景商業学校教頭を務めていたこと，敗戦時は清津女子商業学校長であったことは確かであるが，教頭から校長への転換点がいつであったかは不明である。

松原俊夫は，八幡商業学校～山口高等商業学校を出て1922年，いったん朝鮮銀行に入行したが，２年後の1924年，釜山第一商業学校教諭となった。当時は，伊香賀校長・北川教頭という八幡商業以来の名コンビの最末期にあたる。1926年２月宇都宮益治が校長に就任，これから内地に帰還する1933年３月まで，松原にとっては苦難の時期だったようである。「当時の釜一商は，高等師範出のＵ校長の時代で，先生は商業教育に理解のなかった同校長との確執で悶々とされておられた」[33]と

いう。

1933年３月に防府商業学校が新設され，松原は，「やっと念願叶って山口県に転出」[34]した。以後も宇部商業学校教諭（1937年～）・岩国商業学校長（1941年～）・下松女子商業学校長（1944年～）と引き続き山口県内の商業学校に在任したが，1945年の応召とともに教育界を去った。

間宮文雄は，1922年３月に山口高商を卒業して1924年４月釜山一商教諭となり，1945年３月まで実に21年間勤続した。スキー・ジャンプ流にいえば，釜山一商教諭の「最長不倒距離」保持者である。最後の２年は教頭を務め，1945年４月，開城高等女学校長に転じた。教え子の間宮評には，「開城高女校長で終戦を迎えられ，半年足らずの御在職であったが，現地父兄生徒から三回も送別会を開いて呉れた，と述懐して居られた。先生のご人徳である」[35]とある。開城高等女学校は，1942年４月に開校された内鮮共学校であるが，朝鮮人生徒が圧倒的に多かった。したがって，「現地父兄生徒」はほぼ朝鮮人を指すものと思われ，彼らが３回も送別会を開いてくれたことは，まさに間宮の人徳の賜とみるべきである。

岡本均一は，釜山第一商業学校教諭（1926年９月～1931年２月）から在中国日本人学校のひとつである上海商業の校長に転任した。上海への転出に先立って，当時江景商業学校にいた熊本・鹿本中学時代の同級生竹原国雄に，自分の後釜として釜一商に来るよう勧めている。それは，朝鮮で一時期羽振りのよかった熊本県人同士の連携プレーの一例であった。

樋口光暎は，釜山一商に1931年７月から約10年在任，1938年１月からの３年３ヶ月は教頭であったが，その３年３ヶ月の間に３人の校長（宇都宮・堀内・兼安）に仕えることになった。1941年４月，鉄原中学校が新設され，初代にして結果的に唯一の同校校長となった。

加藤円三郎は，樋口光暎より１ヶ月遅れて釜山第一商業学校教諭となったが，教頭は樋口に先んじ（1935～36年度），したがって校長昇任も早かった。校長としての勤務校は，清津商業学校（1937～40年度）と木浦商業学校（1941～45年度）であった。

以上みたように，元釜山一商教諭の校長経験者は管見の限り12名で，中村嘉一が挙げたリストでは佐伯為蔵が抜けている。この12名のうち朝鮮で校長となった者は８名である。

中村が校長級として挙げた望月恒雅は，釜一商教頭（1931年８月～1935年４月）の後慶尚北道視学官（1935～37年度）を務めた。

九州地区九徳会発行の同窓会誌『九徳』創刊号の「恩師並に職員」名簿には159名の名がある。これから歴代校長と朝鮮人職員を差し引いた145名が日本人元教諭だったとすると，そのうち校長経験者の比率は8.3％（望月を入れれば9.0％）となる。地方所在の学校にしては高率といえるであろう。

このほか，校長ではないが，佐々木邦（釜山商業学校在任1907年４月～1909年８月）が，帰国後ユーモア小説家として名を成す一方，第六高等学校・慶応義塾大学・明治学院大学などの教授を務めたこと，大島徳四郎（釜山商業専修学校在任1913年12月～1919年９月）が母校米沢高等工業学校の教授に栄転したこと，若山尚が釜山第一商業学校教諭（1930～37年度）・京城女子師範学校教諭（1938～45年度）を経て，戦後，愛知大学教授となったことを附言しておく。

次に，判明している範囲で釜一商教諭となる前の最終出身校を示すと以下のとおりである。（括

弧内は釜一商着任年)

山口高商　熊井　郡次（1922）・岡本　茂（1923）・松原　俊夫（1924）・間宮文雄（1924）
東京高師　広瀬　又一（1909）・佐伯　為蔵（1915）・守分伊佐美（1916）・岡本均一（1926）
広島高師　樋口　光暎（1931）・須山　幸夫（1933）・高山　義盛（1938）
東京外語　大久保貞吉（1917）・高橋　政義（1918）・瀧田　慎吉（1934）
東京高商　飯田松太郎（1911）・北川勝次郎（1913）
東京高商附設教員養成所　北山　喜一（1906）・村田長太郎（1912）
京城高商　中村　嘉一（1922）・中山幸三郎（1923）
青山学院　西川　正郎（1919）・村瀬　舜吉（1933）

出身者が１名のケースは，明治学院・佐々木邦（1907），神戸高商・木原小平（1911），久留米商・松村茂（1912），米沢高工・大島徳四郎（1913），ミシガン大・河田吉雄（1915），大分師範・古原八郎（1916），同志社・河野潤三郎（1919），東京帝大・曽良義一（1920），京城高普附設教員養成所・瀬古茂（1923），岩国中・福坂操（1923），神宮皇学館・山田文治（1935），長崎高商・中原繁治（1938），福井師範・秋野乗高（1940）である。

資料に限りがあるため，学歴が明らかな者は上の35名に過ぎず，ここに一定の傾向は認められない。釜山第一商業学校教諭の出身校については，大正末期（1926年２月）に宇都宮校長が就任するや「爾後商業科教員を下部組織に並べ，上位に高等師範出身者で占めるに至った」[36]とか，昭和期を通じて「商業科の担任は，大方山口か大分の高商出身」[37]だったという情報があるが，これを実証することはできない。

本節の終わりに教員人事をめぐるコネの例をふたつ紹介しておこう。先に岡本均一と竹原国雄の連携プレーについては少々触れたが，1930年の春に岡本から釜山転勤の誘いを受けた竹原は，早速，「家内の叔父の友人でもあり同県阿蘇の出身でもある慶尚南道知事渡辺豊日子さんに依頼状を出した。」[38] 渡辺慶尚南道知事の在任当時（1930年12月～1933年８月），「社会には県閥というものがあり，慶尚南道では熊本県人が一番出世をするのだ」[39] といわれた。竹原の人事にはこのような背景があったのである。

秋野乗高の清津商業学校から釜山第一商業学校への異動は，福井師範時代のクラスメートで1940年当時釜山一商の教頭であった樋口光暎の助力によって実現した。秋野は，「私が北鮮の清津商業から釜商に希望転勤の際には，仝君が教頭で，当時の兼安校長先生に特にお願いしてくれました。級友の厚き友情を肌に痛感したことです」[40]と語っている。このように個人的な人脈に基づく人事は，このほかにも多々行なわれたであろうことが容易に想像される。

三．釜山第一商業学校の「学校文化」

生徒の入学に関しては，1934年の「入学者は釜山小学校出身者が殆どで，当初より，はしゃいで暴れていた。私は田舎者で友達もなく，片隅で小さくなっていた。釜山市には，第一より第八小学

校まであり，その中より百名余りが選抜されて入学した」[41]という記録が，手元にある唯一の資料である。1934年の入学者は127名であったから，釜山府内から100余名が入学したとすれば，その他からは20数名だったことになる。1995年９月１日現在の『九徳会会員名簿』に「出身小学校名」欄があるが，すでにこの時点では生存者も少なく，出身小学校がわかるのは，第１～40回の全卒業生2,685名中645名（24.0％）に過ぎない。したがって，この645名を統計的に扱うには無理があるが，筆者の印象としては，釜山出身者が圧倒的に多いことは事実であれ，釜一商は慶尚・全羅道一帯から広く生徒を集めていた感が強い。

1912年に卒業したあるＯＢは，初期の釜山商業学校の校風について，「その頃の学校教育はドコ共ソウですが，厳格なスパルタ式で，特に外地にある学校として不撓不屈の精神を涵養するという点では一段と厳しかつたようです」[42]と述べている。ここにある「不撓不屈」や新校歌の一節「士魂商才」が，釜山商業～商業専修～第一商業学校を一貫するスローガンであった。

この学校の教育内容上の特色として挙げることができるのは，タイプライターと「自動車科」であろう。タイプライターは昭和初期に導入され，「人文の普天に富を求むべき技を教えんと，当時新しき欧文和文タイプライター二台を設備し，自由に放課後も練習せしめ」[43]たという。ちなみに「普天に富を求むべき」は，旧校歌の歌詞である。

教科（随意科）としての「自動車科」は，1931年２学期から開設された。内地にもまだ２～３校しかないという時期のことである。生徒にも好評で，宇都宮校長のもとには，「支那事変後戦地から卒業生より在校中自動車修練が非常に助けとなり軍部にても特別重用せられて居るとの感謝状が幾本も来た」[44]という。

スポーツも盛んで，とくに野球は，一時期朝鮮中等教育界に覇を唱え，1921年の第７回全国中等学校野球選手権大会に初の朝鮮代表として出場したことは前述のとおりである。釜山地区中等学校（釜山中学校・釜山第一商業学校・東莱高等普通学校・釜山第二商業学校）野球リーグ戦の釜山中学との対戦は「釜山の早慶戦」ともいわれ，「中学に対しては一番敵愾心が強くな」[45]ったという。

「ライバル意識」ならぬ「敵愾心」があまりに嵩じたためか，1922～３年頃，テニスと柔道の釜山中学・釜山一商戦は行なわれなくなった。当時の釜山中学柔道部員は次のように回顧している。

寒稽古の終末には必ず武道大会があり，幹部級は釜山商業校と顔合せする事なく，相手は常に憲兵か警察官であった。学校同士の対戦を避けたのは軋轢摩擦をおこさないためである。[46]

修学旅行は，初期の頃は専ら内地旅行（卒業の前々年に九州，前年に関東～関西が相場）だったようである。一行の引率にあたった村田長太郎（在任1912年９月～1924年５月）は，「計画・交渉から遂行まで自分一人でやったのであるから可なり骨が折れた」[47]と語っている。しかし，村田の転任後は，生徒の「自治精神」に任せられたようである。1926年の卒業生によれば，「勿論この旅行は一切が生徒自身の企画から旅館の交渉，見学場所の選定，汽車汽船の運賃の交渉その支払等々迄自治精神でやった」[48]という。

釜山第一商業学校同窓会の会誌・会報に満州修学旅行の記録は見出されないが，卒業生とのインタビューの結果，満州国建国（1932年３月）後，満州への修学旅行も行なわれたことが明らかになった。満州旅行は，単に「修学」にとどまらず将来の満州進出への布石であることが，生徒たちにも自覚されていたようである。すでに多くのＯＢが満鉄などに就職しており，後輩たちの旅行に便宜が図られたことはいうまでもない。

修学旅行をめぐっては，釜山一商の生徒や学校当局の，権力に対する反骨精神が垣間見られる。たとえば1923年，関東大震災を理由に慶尚南道内務部長が内地修学旅行の中止を命じた際は，生徒は同盟休校をもって対抗した。実際には教諭中村嘉一をして，「多くの諸君は勝手に旅行をされその間授業は完全には出来ませんでした」[49]といわしめている。また，1942年には釜山中学が，時局柄内地修学旅行を自粛したが，「修学旅行を中止したのは中学のみで，第一商業も女学校も予定通り出発し」[50]た。

次に，卒業生の進学・就職についてみてみよう。進学と就職の比率については，1924年３月63名が卒業したが，「上級校合格率極めて低調であったその頃，一挙にして二十名近くの合格者を出して，なる程よくやったと入学以来始めておほめの言葉にあづか」[51]ったという。しかし，63名中20名近く，つまり約30％の進学率は空前絶後だったようで，平均すれば10％台の進学率とみるのが妥当なようである。とはいえ，1923年当時，「甲組は主として進学希望者の組，乙組は就職希望者の組」[52]というクラス編成がなされていたことから，そもそも釜山一商には進学も奨励する姿勢があったということができる。

主たる進学先は，東京・神戸・長崎・山口・大分・京城の高等商業学校で，とくに山口高商への進学は，間宮文雄をはじめとする同校出身教諭の勧めるところであった。また，朝鮮唯一の高商として京城高商の人気は創立以来高かったが，兼安麟太郎校長が1943年３月，釜山一商から京城高商に転任するや，「その徳を慕って，多数の先輩が京城高商に進学した」[53]という。高等商業学校からさらに大学へと進んだ者も少なくない。1945年３月，それまで進学の門が閉ざされていた釜山水産専門学校に７名が合格，「理系の専門学校への進学に先鞭をつけた」[54]ものの，ほどなく敗戦～引き揚げとなった。

就職先の内訳は，1935年卒業生の分のみ明らかである。彼ら86名の進路は，「進学十一名，自営十四名，金融機関十四名，商社二十七名，運輸交通十七名，官庁三名であった」[55]。1939年卒業生に関しては次のような記述がある。

成績の好い人達は三菱三井など一流商社に推薦された。朝鮮鉄道釜山管理部への就職希望者が多く，四十名以上は就職したように思う。父兄が鉄道に勤務していた関係があったようである。私も夏休みの終り頃，鶴端先生よりの連絡で履歴書を書いて至急帰るよう指示を受けた。早速釜山に帰った。先生は朝鮮銀行の釜山支店に推薦する。同級生は，故佐藤稔己君，今西通雄君，加們栄君の四人であった。……（中略）……幸にも全員が採用と後日決定の通知が学校にあった。私等如きがよく採用されたことに不思議であったが，以前に入行した諸先輩達のお蔭と感謝したことでした。[56]

これらの資料から推測すると，釜山一商卒業生の３大就職先は商社・鉄道・金融機関であった。鉄道は朝鮮鉄道と南満州鉄道，金融機関は朝鮮・朝鮮殖産・朝鮮貯蓄など朝鮮内の銀行，第一・百三十など都市銀行の朝鮮支店，それに半島各地の金融組合が主であった。

主要就職先のひとつとして満鉄があったように，釜山一商卒業生の進出は満州，さらには遠くモンゴルにも及んだ。それこそが国威発揚の一端と受け止められていたのである。1940（昭和15）年，満州を経て北京に出張した樋口光暎は次のように述懐している。

兼安校長時代，昭和十五年冬卒業生訪問並に学級増加の募金をかね，北京迄出張を命ぜられました。冬休中約二週間，清津経由牡丹江，ハルピン，奉天，北京とかけ足で廻りましたが，日本の勢力の最大に伸びた時で，万事愉快でした。いたる所で卒業生から歓待をうけ，募金も予想以上多く集り面目をほどこしました。

一商健児は仲々よく勉強をしましたので就職は一頭地を抜き，一流会社に続々採用され，又遠く満蒙にも進出したものです。[57]

最後に朝鮮との係わりをみておこう。釜山第一商業学校に1931年４月から1945年７月まで在任した竹原国雄は，釜一商の朝鮮人生徒について，「朝鮮人の子弟は選抜試験に合格した最優秀の者だけ，一学年に一人や二人あるやなしであった」[58]と述べている。朝鮮総督府の各年度版『朝鮮諸学校一覧』によれば，第３次「朝鮮教育令」が施行され「内鮮共学」が謳われて以降（1938年４月～）各学年１人か２人は在学するようになったが，それでも「釜一商の朝鮮人同窓は，通算三十名足らず」[59]であった。すなわち釜山第一商業学校は，九分九厘内地人学校に徹したといってよいが，これは，すぐ近くに1895年以来の伝統をもつ朝鮮人学校（釜山第二商業学校）が存在したことと関係があるであろう。

朝鮮語教育については，第21期生（1923年４月入学）の次のような証言がある。

当時は英語のほか選択外国語として，支那語と朝鮮語があった。満蒙への飛躍を心に秘めて支那語を選ぶ者も多かったが，私は朝鮮語を選んだ。たゞ身近かな韓国人と親しく話が出来ればよいという単純なものであった。……（中略）……たしか呉先生といわれたが，物やさしい方だったと記憶する。私を含めて悪童共は，やさしい事をいゝことにして，余り勉強をしなかった。お陰で，ハングル文字は読めても，意味もわからない。まして会話に至っては，全く苦手である。方言の悪口などを若干覚えておるのが，不思議である。今から思えば惜しいことをしたものであった。[60]

朝鮮語が選択「外国語」だったというのはおかしな話であるが，ともあれ朝鮮人の講師（呉瀅植）による正式な朝鮮語教育体制があったこと，しかし，生徒たちは必ずしも真剣には学ばなかったことがわかる。朝鮮語はその後，教えられなくなったという。その時期ははっきりしないが，少なくとも1934年10月に就任した講師金相洪が辞任して以降，恐らくは日中戦争勃発（1937年７月）後，

中国語の需要が高まるとともに朝鮮内ではいわゆる「国語常用」が叫ばれだしてからのことであったろう。

ついでながら，太平洋戦争も末期の1944年，「当時英語の授業は敵国語と言う事で，多くの学校では廃止していた様だが，我が一商では時間割に英語授業があった」[61]ことを付け加えておく。

おわりに

釜山第一商業学校が「朝鮮商業教育のメッカ」であったことは，歴代校長がいずれも商業教育のベテランで，多くは教育界の大物と目される人物であったこと，同校教諭から他校の校長となった者が，地方所在学校にしては多かったこと，によって証明される。生徒の進学・就職に関する数値データは乏しいが，総体的な自己評価として，1926年の「創立二十周年記念式典をさかいに，一商の名声は，鮮内は勿論，本州，満蒙にも及んでいた。就職は希望者全員採用され，上級校(ママ)えの入学率も他校を圧し，優秀校として羨望の的であった」[62]という。すなわち，関係者の主観では，生徒の進学・就職においてまさに「朝鮮商業教育のメッカ」だったのである。

1945年９月，米軍政庁慶尚南道当局から釜山第一商業学校など３校の事務引き継ぎを任された姜三栄は，次のような回顧談を残している。

私は，釜山一商の高田邦彦校長に事務引き継ぎを要求した。彼は，解放前，釜山二商の第５代校長として在職したこともある政治的な手腕を持った教育者であったが，わが方の引き継ぎ要請に対しては，米軍政が日本人学校だといって全財産を没収してしまい，校舎も米軍が使用しているので，引き継ぎに応じる必要がないと主張した。ところで，解放当時，釜山一商の韓人在学生は13名だけであったが，親日派と見られるのが怖くてみんな逃避し，ひとりしか残っていなかった。

当時，米軍政は，実業系学校は既存私立学校である草梁商業，立正商業の２校を廃校し，釜山全域を両分して南部方面の通学生は新設の慶南商業学校に，北部方面の通学生は釜山二商に編入するよう決定した。[63]

ここにある慶南商業学校の校地・校舎が釜山第一商業学校のそれであり，現在は慶南商業高等学校となっている。しかし，慶南商業学校は，あくまでも韓国側の新設校であって，釜山第一商業学校の後身ではない。「朝鮮では『僕は釜山一商の生徒だ』『俺は釜山一商の卒業だ』と凡てが誇りとし，凡てが認めていた程の」[64]釜山一商は，日本の敗戦とともに終焉を迎えたのである。毎年人々の目を楽しませた校庭の桜も，今はもうない。

ちなみに釜山第二商業学校は，1946年１月１日，かつての釜山商業学校の名を取り戻した。『釜商八十年史』は，「二商という屈辱的な校名からの感激的な還元であった」[65]としている。

註

（※はハングル文献）

（1） 釜山第一公立商業学校同窓会誌『九徳』創刊号　九州地区九徳会　1964年　p.41，42，43
（2） 『九徳会報』第18号　1971年９月　p.9（九徳会報の題号も「九徳」〈第４号までは「近畿九徳」〉であるが，上掲『九徳』との混同を避けるため本稿では『九徳会報』とする。）
（3） 森田福太郎編『釜山要覧』釜山商業会議所　1912年　p.54
（4） 『教育実験界』第10巻第２号　1902年７月25日　交詢界
（5） 『九徳会報』第14号　1969年５月　p.2
（6） 『教育時論』第719号　1905年４月５日　時事彙報
（7） 同　　上　第729号　1905年７月15日　時事彙報
（8） 『教育実験界』第17巻第３号　1906年２月10日　彙報界
（9） ※『釜商八十年史』釜山商業高等学校　1975年　p.77
（10） 同　　上　p.79
（11） 『九徳会報』第25号　1975年１月　p.11
（12） 『九徳』創刊号　p.40
（13） ニュー釜山会会報『龍頭山』第７号（釜山里帰り特集号）1997年１月　p.11
（14） 『九徳会報』第53号　1989年１月　p.12
（15） 『八幡商業五十五年史』滋賀県立八幡商業学校　1941年　p.357
（16） 『九徳会報』第47号　1986年１月　p.4
（17） 『九徳』創刊号　p.39
（18） 『九徳会報』第16号　1970年７月　p.12
（19） 同　　上　第18号　1971年９月　p.9
（20） 『近畿九徳会報』第７号　1966年10月　p.9
（21） 『九徳会報』第24号　1974年８月　p.15
（22） ※『釜商八十年史』p.124
（23） 『近畿九徳会報』第５号　1966年１月　p.4
（24） 『九徳会報』第22号　1973年10月　p.10
（25） 『九徳』創刊号　p.41
（26） 同　　上　pp.40-41
（27） 『九徳会報』第33号　1979年１月　p.2
（28） 『近畿九徳会報』第３号　1965年５月　p.6
（29） 『九徳会報』第18号　p.14
（30） 同　　上　同　　上
（31） 同　　上　第60号　1992年７月　p.3
（32） 同　　上　第17号　1971年１月　p.8

(33) 同　　上　第62号　1993年７月　p.10
(34) 同　　上　p.11
(35) 同　　上　第35号　1980年１月　p.4
(36) 同　　上　第47号　p.4
(37) 『九徳』創刊号　p.44
(38) 『九徳会報』第17号　p.2
(39) 『釜山第六公立尋常小学校同窓会　同窓会誌』1994年　p.25
(40) 『近畿九徳会報』第４号　1965年９月　p.9
(41) 『九徳会報』第73号　1999年１月　p.3
(42) 『近畿九徳会報』第３号　p.8
(43) 『九徳会報』第11号　1968年２月　p.5
(44) 『九徳』創刊号　p.41
(45) 『近畿九徳会報』第３号　p.15
(46) 亀峰会編『幻の名門校〈釜山中学回想記〉』リベラル社　1988年　pp.41-42
(47) 『近畿九徳会報』第１号　1964年９月　p.3
(48) 『九徳会報』第34号　1979年７月　p.5
(49) 『近畿九徳会報』第４号　p.2
(50) 亀峰会編　前掲書　p.491
(51) 『近畿九徳会報』第１号　p.14
(52) 『九徳会報』第11号　p.11
(53) 同　　上　第68号　1996年７月　p.18
(54) 同　　上　第70号　1997年７月　p.2
(55) 同　　上　第52号　1988年７月　p.14
(56) 同　　上　第74号　1999年７月　p.2
(57) 『九徳』創刊号　p.45
(58) 同　　上　　pp.43-44
(59) 『近畿九徳会報』第６号　1966年６月　p.4
(60) 『九徳会報』第52号　pp.4-5
(61) 同　　上　第74号　p.6
(62) 同　　上　第17号　p.6
(63) ※『釜商八十年史』p.204
(64) 『九徳』創刊号　p.217
(65) ※『釜商八十年史』p.204

稲 葉 継 雄

Fuzan Daiichi Shōgyō Gakkō
— a case study of a naichijin (Japanese) school in colonial Korea —

Tsugio INABA

Fuzan Shōgyō Gakkō (Fuzan [Pusan] Commerce School; later Fuzan Daiichi Shōgyō Gakkō) was established in April, 1906. The school, the first Japanese middle school abroad, was renowned not only for its history but for its quality education in the field of commerce.

This study aims at clarifying the factors that made possible the school's top quality education program. The prominence of Fuzan Daiichi Shōgyō Gakkō is demonstrated by the fact that all of its principals were considerably experienced and regarded as the top figures in the field of commercial education (to put it another way, no one was eligible to become the principal of this particular school without the experience of holding the principal position in other schools). It should be also pointed out that many of its faculty members later went on to become principals in other schools, which was not very common for a school located outside Keijō (Seoul). Despite the small amount of data available on its graduates' enrollment in higher educational institutions and careers, their memoirs and words demonstrate that their successful achievements, both in academic and other careers, were a source of pride for the school.